

1 過去3年及び今年度の数値動向

項目	平成29年度	平成30年度	令和元年度	今年度目標と実績
教員相互の授業参観延べ回数	1111回	△230回	▼220回	250回 ▼211回
授業満足度(学校評価アンケートより)	61.2%	▼61.1%	▼55.5%	65.0% △67.4%
英検準2級以上合格者数	55名	△125名	▼101名	150名 △225名
GTECスコア CEFR A2以上(2年)	47.4%	▼31.0%	△63.1%	65.0% △83.3%
夏期冬季講習受講者数(延べ)	1588名	△2247名	△2752名	3000名 ▼1048名
生徒の1日平均学習時間(平日9月)	1年 29分 2年 39分	1年 △52分 2年 ▼36分	1年 ▼39分 2年 △58分	1年60分 ▼38分 2年90分 ▼57分
外部模試(1月実施)偏差値	1年 44.3 2年文46.7 2年理43.7	1年 △46.3 2年文▼46.1 2年理▼42.7	1年 △46.5 2年文△47.1 2年理△45.3	1年▼45.0 2年文△49.9 2年理△45.6
大学入試センター試験偏差値	49.4	▼48.2	△48.9	50.0 ▼47.4
現役進路決定率	80.1%	△88.7%	△91.8%	95% △92.7%
4年制大学合格者数(現役)	329名	△337名	△416名	425名 △512名
国公立大学合格者数(現役)	5名	▼4名	▼2名	5名 ▼1名
私立大学(早慶上智理科)現役合格者数	3名	△4名	▼3名	5名 ▼2名
私立大学(GMARCH)現役合格者数	17名	▼16名	△22名	25名 △28名
私立大学(成成獨国武明学)現役合格者数	19名	▼16名	△26名	30名 △48名
私立大学(日東駒専)現役合格者数	36名	▼32名	△85名	100名 △98名
年間遅刻30回以上の生徒数	28名	▼39名	△18名	15名 △3名
年間遅刻延べ回数	5368回	△4965回	△4094回	3500回 △1737回
特別支援教育に関する委員会の開催回数	28回	▼26回	△28回	30回 ▼23回
統一体力テスト体力合計平均値	52.7	△53.7	△54.0	55.0 ▼53.6
部活動加入率	86.1%	▼81.0%	△86.0%	87.0% △95.0%
学校満足度(生徒)(学校評価アンケートより)	63.9%	▼56.7%	▼49.5%	60.0% △58.6%
学校満足度(保護者)(学校評価アンケートより)	85.5%	▼84.3%	▼77.8%	80.0% △82.0%
生徒の特別活動満足度	61.0%	▼59.5%	▼52.7%	60.0% △82.9%
学校説明会参加者数(本校実施分)	1269名	△1270名	▼929名	1300名 △1391名
中学校進学対策委員会志願倍率	1.36倍	▼1.28倍	▼1.01倍	1.25倍 △1.28倍
入学選抜応募倍率(推薦・一次募集)	推薦2.46倍 前期1.72倍	推薦△2.78倍 前期▼1.34倍	推薦▼2.63倍 前期▼1.25倍	推薦2.80倍 △2.67倍 前期1.40倍 △1.41倍
ホームページ更新回数	156回	△250回	(-)250回	300回 ▼209回
一般需用費のセンター執行率	55.0%	▼49.0%	▼45.6%	50.0% △48.1%

## 2 今年度の主な取組

### (1) 感染症防止対策

- ア 生徒登校時、四人一組で昇降口にて体温チェック、担任は教室で生徒の健康観察
- イ 毎時休み時間にサーキュレーターを活用するなどして換気の徹底
- ウ 昼食時の校内放送による注意喚起と教員の巡回
- エ 放課後、共用箇所の消毒作業

### (2) 学びの保障

- ア 臨時休業期間中におけるHPやクラウドサービス等を活用した課題配信
- イ 校内寺子屋（放課後学習）や補習・追試等を通じた基礎・基本の定着
- ウ 定期考査前の7時間目（全生徒を対象とした放課後の自学及び補習）実施
- エ 補講用の動画配信、夏季休業期間における講習及び予備校サテライン講座の実施

### (3) 教員の授業力向上

- ア 管理職による授業観察（2回）後の個別指導と生徒による授業評価（外部委託）の活用（1回）
- イ 大手予備校主催の教員対象セミナーへの参加（7名）
- ウ 相互授業参観（211回）

### (4) 指定校事業の活用

- ア ALCMコミュニティ参加校：グランドデザイン作成及び新教育課程の編成等
- イ 英語教育推進校：GTEC及び英検等を活用した英語4技能の計画的育成
- ウ 進学指導研究校：個々の生徒に応じたきめ細かな進路指導
- エ 学力向上研究校：校内寺子屋（放課後学習）を通じたきめ細かな学習支援

### (5) 特別活動の工夫

- ア 感染症防止対策を施した上での学年行事の実施
- イ 係・委員会活動等を通じた生徒の主体性・判断力・行動力の育成
- ウ 部活動参加生徒の自発的行動力を高める指導の工夫

### (6) 学校評価の項目・実施方法の見直し

- ア 学校評価アンケート項目（生徒・保護者・教職員）の整理と修正
- イ 地域対象アンケート形式の大幅変更と配布対象の工夫

### (7) コロナ禍における募集対策

- ア 学校の特色の明確化・可視化
- イ 生徒（部活動・生徒会・放送委員会）による学校紹介動画のホームページ掲載
- ウ 中学校及び私塾への学校紹介DVDの送付
- エ 学校見学会及び学校説明会での生徒による学校案内

## 3 今年度の成果と課題

### (1) 学習指導

成果：前年度と比べて、学校評価における授業満足度が約1.2ポイント増、英語検定準2級以上合格者数が約2.2倍に、2学年1月実施外部模試偏差値が、文系で2.8、理系で0.3上昇した。

課題：前年度と比べて、長期休業中の講習受講者数が1/3に、教員相互の授業参観総数は9回減少、1年1学期実施外部模試偏差値が1.5下降した。一日当たりの家庭等自主的学習時間が伸びない。

考察：管理職による授業観察と生徒による授業評価の観点は同一の10項目とした。学校評価における授業満足度は、そのうち「学力の向上や進歩が実感できたか」と「学び方が身に付いたか」を問うことにより測ることとした。肯定的回答の割合は、前年度比11.9ポイント増の67.4%となった。

その一方で、授業満足度に関連する「学ぶことの意義」への理解を問う質問に対する肯定的回答の割合は56.3%にとどまっており、4割強の生徒の意識を高めるための具体策を講ずることが必要であることも明らかになった。次年度も授業観察後の指導⇒改善策試行⇒生徒による授業評価⇒授業観察と授業評価データを基にした指導⇒改善策の施行・検証というサイクルを繰り返し個々の教員の授業力向上に努めるとともに、生徒に学ぶことの意義を理解させるために様々な働きかけをしていく。

### (2) 進路指導

成果：前年度と比べて、現役進路決定率が4.5ポイント増、4年生大学の合格者総数が63名増、GMARCHの合格者数6名増、成成獨国武明学の合格者数が21名増となった。また、13名が大学入学共通テストを利用入試で合格した。

課題：前年度と比べて、国公立大学合格者数が1名減、早慶上理現役合格者数が1名減となった。手堅い出願により大学合格者総数は前年度より100名程度増加したが、概して国公立大学や難関私立大学へのチャレンジを躊躇する傾向がみられた。

考察：大学入試制度が変わる年度であることに加え、コロナ禍で当初の2か月間が臨時休業期間となった。オープンキャンパスや説明会も例年通りに行われなかった。それでも「コロナを言い訳にしても進路実現に向けてしなければならないことは待ってくれない。」ということ繰り返し生徒に伝え、英検の受験を奨励し、総合型選抜や一般入試に向けてきめ細かな指導・支援を行ってきた結果、現役進路決定率は目標とする95%を上回り、入学時の学力レベルである日東駒専クラス以上の合格者数が約半数を占めるようになった。今後は、総合的な探究の時間の更なる充実を図るとともに、

生徒に学ぶ意義を実感させるよう工夫を凝らし、単なる大学名だけではなく、自らの学びたいことを実現できる最適の進路先を選択し、より高い目標に向かって精進する生徒の育成に努めていく。

### (3) 生活指導

成果：前年度と比べて、遅刻30回以上の生徒数は1/5に、年間延べ遅刻数は約4割に減少した。服装、頭髪、化粧などの身だしなみに関する禁止事項に対し、極端に違反する生徒や違反を繰り返す生徒はほぼいない。主に学年担任団の地道な取組が成果をあげていると思われる。

課題：自転車を中心とした通学マナーに関しては以前に比べて格段に良くなったものの、未だ安全に対する意識が低い生徒もいるため、近隣からの苦情の解消には至っていない。

考察：学校評価において、規則正しい生活習慣、自転車乗車時のルール順守と思いやりの心、相談できる人の有無、SNSの正しい使い方、家庭でのルール設定、規律ある生活、良好な人間関係を構築できているか等の問いには概ね生徒・保護者ともに肯定的回答をしている。記述箇所では、生徒・保護者ともに身だしなみに関するルール緩和の要望があげられているが、本校が「安心して通える学校づくり」のためにしっかりと生活指導を行っている証であり、基準を緩めるという考えはない。改めて生徒に粘り強く身だしなみ指導の意義を理解させるよう努めていく。

### (4) 健康教育

成果：コロナ禍においても家庭での統一体力テスト合計平均値は例年並みの53.6であった。男女とも東京都平均を上回った。女子は1,2年とも全国平均も上回り、「令和2年度子供の体力向上推進優秀校」に選出された。

課題：男女とも「20mシャトルラン」の得点が低い傾向にある。なわとび、長距離(持久)走等、長時間粘り強く続けていく運動を取り入れるようにする。

考察：例年通り6月に統一体力テストを実施することを想定し、保健体育科として臨時休業期間中に体力低下を防ぐよう家庭でもできるトレーニングの課題を提供した。そして、登校再開後の分散登校期間中の授業を活用しながら測定を実施した。例年であれば1学期に体育祭を実施しているが、感染症及び熱中症の防止のため実施せず、代わりに秋以降に学年ごとに「記録会」や「球技会」等を実施した。

今年度は、コロナ禍のため、環境保全に係る地域貢献活動がほとんど実践できなかった。代わりにSDGsを意識しながらの探究活動等に力を注いだ。コロナ禍の終息とともに生徒に体験活動の機会を提供するため、地域と緊密な連携を図っていく。

### (5) 特別活動

成果：学校評価における特別活動満足度が、前年度比30.1ポイント増の82.9%に上昇した。

課題：学校行事や委員会活動における生徒の自主的活動割合を向上させること、部活動や生徒会活動等、授業以外の場面での活躍をサポートできる体制をつくること

考察：特別活動満足度は、過去3年間の数値と比べても群を抜いて高くなった。今年度は部活動、学校行事、委員会・当番活動の3点について別個に尋ねた上で総合的に満足度を算出した。肯定的回答の内訳は、部活動が77.7%、学校行事が84.5%、委員会・当番活動が86.4%であった。限られた条件の中で最大の効果を求め取り組んだ部活動や学校(学年)行事、一人一人が自覚と責任をもち取り組んだ委員会・当番活動の成果であると思われる。人間形成の場として、授業だけでなく、特別活動の果たす役割は大きい。長期間にわたり制限が加えられる中でも密度の濃い活動を行ってきた成果を従来の活動の中で生かしていけるよう、校内の体制を整備していく必要がある。

### (6) 広報活動

成果：学校評価における保護者の学校満足度が、前年度と比べて4.2ポイント増の82.9%、学校説明会の参加者数は462名増の1391名、中進対志願倍率は0.27ポイント増の1.28倍、入選(第一次募集)応募倍率0.16ポイント増の1.41といずれも目標を達成した。

課題：警察と連携した交通マナー学習や交通安全講習の実施、安全指導における通学エリア付近の家庭への協力依頼、学校の取組・良さの積極的発信、地域との連携、小・中学校との交流等、地域の子供たちに模範を示してほしいという地域の要望に応えていくこと

考察：今年度、新たにホームページ委員会(事務局は総務)を立ち上げ、タイムリーな情報提供のための具体的な流れをつくりあげ、実践につなげた。また、組織的な募集活動を推進するため、「募集対策委員会」も設置した。多くの中学生や保護者からの、「飾り立てられた学校の理念だけではなく、そこで学校生活を送る生徒の姿を見たい。」という要望を受け、「学校は生徒が主役である。」という原点に立ち返り、コロナ禍においても様々な形で生徒が表舞台に立ち活躍できる場を設けた広報活動を展開したことが大変好評であり、応募倍率にもつながったと思われる。創立50周年を迎える次年度は、今年度に構築したホームページのコンテンツを更に充実させるとともに、できる限り生徒の活動の場を広げていくよう、工夫を凝らしていく。

### (7) 組織運営

成果：学校評価の記述箇所において、生徒、保護者からは、各教科の小テスト、グループ活動、放課後補習、チューターの活用、長期休業中の講習、テスト期間の7時間目、特進クラスの編成、英検・GTEC等の指導、自習室の活用、進路ガイダンス、面接指導、キャリア教育の内容、朝の通学指導、遅刻者指導、生徒相談体制の充実等が本校の取組で効果があることとして挙げられた。

地域の方からは、生徒のマナーがよくなってきた、通学時や地域活動の中で声掛けや手助け・見守り活動を行っていききたい、教職員の指導がよくされているなど、前向きな励ましの御意見をい

ただいた。地域との連携・地域貢献活動、進学実績や部活動実績の向上、公開講座や施設開放の拡充、学校行事の公開、環境教育・環境保全活動の推進等、地域の都立高校として本校に期待する内容も明らかになった。本校が重点的に取り組んでいることの効果を実感していただいたことは大きな成果である。

課題：生徒から一部の授業の形態や説明方法等に関する要望、保護者から学習指導、補習・補講、英語教育、オンライン学習の更なる充実への要望等が挙げられた。授業観察、生徒による授業評価、相互授業参観及び外部機関主催の研修会参加等、教職員の研修を更に充実させ、授業改善や組織体制の整備を図っていく必要がある。

教職員については、ほぼ全員が学校経営計画やグランドデザインを意識しながら教育活動や校務に取り組んでいることがわかった。そして、ALCMコミュニティ参加校、進学指導研究校、英語教育推進校、学力向上研究校（校内寺子屋事業）等、都の教育施策を取り入れた学校運営の方針がようやく理解されてきたように思われる。概ね肯定的な回答の割合は8割から9割以上であったが、学習に関する2項目、特別活動に関する2項目、生活指導に関する1項目で6～7割程度にとどまっており、意図的・計画的にOJTを推進するなどして組織的な対応力を高めていく必要がある。

考察：今年度は前年度までの課題を踏まえ、学校評価の質問項目及び実施方法を見直した。全体的に前年度と比べて「わからない」という回答の割合の減少がみられ、肯定的な評価の割合は上昇した。また、質問項目や調査方法を変更したことにより、回収率が上昇するとともに、学校の課題や改革の方向がより明確になった。今年度と前年度の回収率は次のとおりである。

生徒	99.3% (938/945)	前年度	94.9% (896/944)
保護者	83.2% (786/945)	前年度	70.1% (662/944)
地域	94.0% (47/50)	前年度	55.7% (39/70)
教職員	100% (49/49)	前年度	90.9% (50/55)

それでも依然として、「わからない」という回答が一定数いる状態が回避できたわけではない。誰もが明確に回答できるよう、問い方や情報提供に一層の工夫が求められている。今年度はコロナ禍における経験のない状況下での学校運営を強いられた。そのため、特殊な事情も数多くあり、単純に前年度と比較することはできないが、それでも改革に向けた諸々の施策の成果が表れてはきていると思われる。次年度は質問項目については今年度のものを原則として継承しながら、選択肢については、本校で実施している「生徒による授業評価」のものと統一して、A とてもそう思う B かなりそう思う C 少しそう思う D あまり思わない E まったく思わないの5択とし、はっきりとした傾向をつかむようにしたい。

#### (8) 働き方改革

成果：職場としては1月までの6カ月平均定時外在校時間39.09分でUnder45となっている。

課題：減少はしているものの、依然として1月の定時外在校時間45時間超えの教職員が5名、1月までの6カ月平均定時外在校時間80時間超が6名、そのうち100時間超が2名と長時間労働の解消に至らなかった。

考察：働き方改革の趣旨を踏まえ、次のような取組を実践した。次年度以降も引き続き重要課題として取り組んでいく。

##### ア 業務の効率化

- ・校内分掌とは別の委員会やPT等の意義と役割を踏まえ、整理・再構成を図った。
- ・大量の印刷物のスリム化を図り、ペーパーレス化を推進しようとしたが、十分ではなかった。
- ・個人作成のデータや資料を全体のフォルダに格納し、共有することで、業務の省力化を図った。
- ・各種調査等では、異なる依頼先から類似で少しずつ異なる資料の提供が求められ、校内のデータをそのまま使うことができず、加工したり複数の資料を参照したりするのに多大な労力を要する。調査回答に係る時間と労力の縮減のための取組について、校内外に協力を求めたが、残念ながら飛躍的な改善は感じられなかった。調査実施者側が既存のデータ収集に努め、調査の一本化を図るよう努める必要がある。

##### イ 長時間労働の解消と適切な健康管理

特定の教職員に負担が集中しないよう、担当業務の内容を精査し、校務分担の均一化を図った。

「個人別在校時間管理表」を作成し、産業医と連携して、業務縮減や心身の健康維持に対する具体策について指導・助言し、在校時間の多い教員の減少を図った。

##### ウ 教職員のモラールアップ

各教員が力点を置き、継続的に活動していることや成果をあげていることを理解し、認め合っていくことができる、温かい雰囲気職場づくりに努めた。今年度は、4名の教員が「ふれあい感謝状優秀賞」「教育研究助成(学校研究)」「文部科学大臣優秀教職員表彰」、「GOOD COACH賞」を受賞し、校内でも表彰した。また、授業や部活動等、生徒の変容を実感できるデータ公開や、全校集会での表彰等を推奨した。